風の波紋
『阿賀に生きる』（撮影）／『チョコラ！』
小林茂 監督作品
えちごつまり
越後妻有の里山暮らし。
撮影＝松根広隆
現場録音＝川上拓也
音響＝菊池信之
編集・アソシエイトプロデューサー＝秦岳志
編集協力＝山崎陽一
音楽＝「めざめのとき」天野季子（作詞・作曲・歌）
プロデューサー＝矢田部吉彦　長倉徳生
後援＝「小林茂の仕事」Oタスケ隊
助成＝文化庁文化芸術振興費補助金
製作＝カサマフィルム　配給＝東風
2015年／99分／DCP／カラー／日本
山形国際
ドキュメンタリー映画祭2015
正式招待
日本映画撮影監督協会
第24回 JSC賞
www.kazenohamon.com

風がおしえてくれたこと。
いのちと暮らす、
いのちを食べる。

それは手づくりの世界でもあり、
この大地とともに暮らすプロフェッショナルな人びとの世界だ。
進歩ではなく、深められていくことを喜ぶ世界。
発展ではなく永遠の世界。技術ではなく技の世界。知識ではなく知恵の世界。
そしてこんな人間たちの営みを見守っている自然。
それはいまでは多くの人たちがあこがれている世界だ。

――内山 節（哲学者）

使い方がわからないから農薬は使わない

芽吹きの季節に、枝の折れた山桜を発見！

舞台は越後妻有（えちごつまり）の里山。この雪深い村に都会から移り住んだ木暮さん夫婦は、茅葺き屋根の古民家を修復し、見よう見まねで米を作って暮らしてきた。ゴリゴリと豆を挽いてコーヒーを淹れ、野山の恵みを食卓にならべる。草木染職人の松本さんは、山桜で染めた糸を夫婦並んで手織りする。色鮮やかな着物が仕立てあがるころ、娘さんが成人式を迎えた。

悠々自適、気ままな田舎暮らしに見えるけれど、ときに自然はきびしい。冬ともなれば雪がしんしんと降り続け、来る日も来る日も雪かきに追われる。ひとりでは生きられない。茅葺きや稲刈りも協働作業だ。木暮さんのまわりには不思議と個性ゆたかな仲間が集まり、ことあるごとに囲炉裏を囲んで宴がはじまる。歌と笑い、もちろんお酒もかかせない。そうやって、ここでは新しいかたちの「結（ゆい）」がゆるやかに息づいている。

ある春の朝、大きな地震がおきた。木暮さんの家も全壊したが、彼は再建を決意する――。

すきな食べ物は、ごはん。

コシヒカリの里だからね

積雪が4メートルを越えるこの土地では「雪かき」を「雪掘り」と呼ぶ

レーザーディスクのカラオケも健在

『阿賀に生きる』『阿賀の記憶』のスタッフたちが見つけた ドキュメンタリー映画の新たな地平

手間を惜しまず丹念に育てられた米や野菜が、私たちの日々の暮らしを彩るように、心をこめて作られた一本の映画が、人生のたいせつな糧となることがあります。『風の波紋』は、『阿賀に生きる』『阿賀の記憶』のスタッフたちが5年の歳月をかけて、じっくりと作りあげた映画です。ぜひ劇場のスクリーンでご堪能ください。

風の波紋

fb.com/kazenohamon.movie　@kazenohamon　www.kazenohamon.com